

2021年5月9日復活節第6主日説教

司祭バルナバ菅原裕治

イザヤ書 45 章 11 節-13 節、18 節-19 節  
使徒言行録 11 章 19 節-30 節  
ヨハネによる福音書第 15 章 9 節～17 節

ゴールデンウィークが終わりましたが、緊急事態宣言が5月末まで継続となりました。5月11日にリモートで教役者会が開かれますが、先の見えない状況がまだ続くと思います。歴史上、災害、戦争、迫害などの理由で、礼拝の執行が困難になったことはあります。しかし、誰かを守るために自らの意志で、教会が公禱の礼拝を長期に休止したことは、過去に例がないと思います。そのような中でも、『聖書』を通して、主なる神様の「み言葉」に聞くことの大切さは変わりません。しかし、『聖書』が「み言葉」であるのは、『聖書』自体の存在によるものではありません。教会の公禱の礼拝を通して、教会に呼び集められる人々の中で朗読され、初めて「み言葉」となるのです。しかし、わたしたちは、その公禱の礼拝自体が執行できない中にあります。その意味では、わたしたちは、主なる神様から、『聖書』とは何か、「み言葉」とは何か、そのように問いかけられているのかもしれない。

その『聖書』について、今は、過去と異なることがあります。それは『聖書』についての情報を、今までになく集められることです。各自に一冊『聖書』があるということ以上に、インターネットを通じて数種類の日本語訳『聖書』を読むことができます。また、様々な言葉に訳された『聖書』も読むことができます。それがスマートフォン一つでも可能となります（授業中、紙の聖書〔誤変換ではありません〕を持たない神学生がいるのを見たときは、それなりに衝撃でした）。しかし、情報が多いこと自体が、必ずしも恵み豊かというわけではありません。余計に混乱が増える場合もあります。最初にこの観点から、本日の旧約日課の「イザヤ書」の45章11節を見ていきましょう。

お配りした本日の『聖餐式聖書日課』、旧約聖書「イザヤ書」45章11節は、「新共同訳」を用いています。そこには、「イスラエルの聖なる神、その造り主、主はこう言われる。あなたたちはしるしを求めるのか。わたしの子ら、わたしの手の業について、わたしに命ずるのか。」とあります。前の口語訳では、「イスラエルの聖者、イスラエルを造られた主はこう言われる、「あなたがたは、わが子らについてわたしに問い、またわが手のわざについてわたしに命ずるのか。」」とありました。新しい「聖書協会共同訳」では、「イスラエルの聖なる方、イスラエルを形づくられた方、主はこう言われる。これから起こることをあなたがたは私に尋ねるのか。私の子らについて、私の手で造ったものについて、私に命じるのか。」となっています。三つの訳が微妙に違います。

原文の冒頭にあるのは、「主はこう言われる」です。ここは訳文とその置く位置は共通しています。ここの「主」は、周知のとおり、「みだりに唱えてはならない」（出エ 20：2）、主なる神様の「名前」固有名詞です。訳文の冒頭の「イス

ラエルの聖なる神」「イスラエルの聖者」「イスラエルの聖なる方」は、それぞれの文章の中では違和感がありませんが、このように並べると意味が異なることがわかります。ここは「イスラエル」という固有名詞と「聖なる」という形容詞から形成されていますが、直訳するならば「イスラエルの聖なる（何か）」となります。「（何か）」をどう補って訳すが問題です。文脈を踏まえた意味から考えて、異邦人に主なる神様のみが、聖なる（特別な）神様であることを示しているので「神」（新共同訳）とするか、主なる神様は偶像のような神様ではなく、人格的な存在であることをここで強調してとらえるならば「者」（口語訳）、原文の意味の広がりを残し、かつ「聖」であることを強調して、よりわかりやすい訳とするならば「方」（聖書協会共同訳）ということになるかと思えます。

次の「**その造り主**」（新共同訳）についても訳が分かれています。ここは「（材料を工夫して器、彫刻などを）造る」という動詞の分詞です。この言葉はすでに45章7節の「**光を造り**」、9節「**自分の造り主と争う者は**」「**あなたの作ったものに**」、また18節でも「**地を形づくり**」「**形づくられた方**」として用いられています。「造る（何か）」を示し、その（何か）をどう補い訳すかが問題です。口語訳は「**主はこう言われる**」という部分につなげて訳しています。新しい「聖書協会共同訳」では「**形づくられた方**」としています。「聖なる」「造られた」という二つの言葉が、「言」を語る方の属性として重要であることを明確にするならば、「**イスラエルの聖なる方、イスラエルを形づくられた方、主はこう言われる**」という「聖書協会共同訳」が最もすっきりしているといえるでしょう。

次の「**あなたたちはしるしを求めるのか**」は、翻訳するのが難しいところであり、訳が大きく異なります。ここには「来る」という一般的な動作を示す動詞の分詞（複数）があります。それゆえに「来る（何か）」となり広い意味を持ちます。もっとも原文に近いのは、新しい「聖書協会共同訳」です。つまり「**これから起こること**」です。ただし、「新共同訳」は、それが未来の事柄という意味を分かりやすくするために、「しるし」と言葉を補って訳したのでしょう。口語訳が訳出していない理由はわかりません。しかし、この節は、イスラエルの主なる神様が、今も生きている神様として、他の神々を信じている異邦人に対して、造られた存在に過ぎない人間が、未来を定めることができる主なる神様に、問うのかと語っています。このことを訳の違いから受け止めることが大切です。訳の違いは、混乱を招きますが、比較するからこそ、導き出される恵みがあります。

自分の民に対してではなく、ほかの神々を信じている異邦人に対して、このように命じる主なる神様とは、なんと自己中心な方かと思ってしまうのですが、それでよいのです。主なる神様は、異邦人の神々のように、人間が自分の望む未来を実現してもらうために、あるいは自分の願望を満たすために信じる対象ではないからです。つまり人間中心ではないのです。今の自分たちの思いや考えとは異なっていると看做しても、未来に向けて、自分たちを必ず良い方向へと導いてくださる方だと、信じるのが大切なのです。『聖書』が示す信仰は、主なる神様中心なのです。

11節を中心に見ましたが、「イザヤ書」45章全体としては、「**主が油を注がれた人キュロスについて、主はこう言われる**」(イザヤ45:1)とあり、イスラエルの主なる神様が、異邦人の国ペルシャの王をメシアとして立てて、イスラエルの民をバビロン捕囚から解放したことを告げます。それは単に手段として異邦人の王を用いたということではありません。主なる神様が、イスラエルの神様であると同時に、民族的枠を超えた神様であることを告げています。なぜならば、天地を創造された方、すべてのものは、主なる神様によって造られたからです。45章18節に「**神である方、天を創造し、地を形づくり造り上げて、固く据えられた方混沌として創造されたのではなく人の住む所として形づくられた方**」とある通りです。それゆえ、ここは異邦人もそのことを知り、相互に謙虚になることの大切さも語っています。その方を信じて歩む未来には、「**わたしは主、正義を語り、公平を告知する者**」(イザヤ45:19)が導いてくださる、真の平和があるからです。

もちろん、主なる神様がそのように求めている対象は、当時の異邦人とイスラエルの他、時間と空間を超えて、今、『聖書』を読んでいるわたしたちも含まれています。そして、わたしたちは、より深くこの「イザヤ書」が示している事柄を理解しなければなりません。なぜならば、わたしたちは、「イザヤ書」が書かれた時代には、思いもしなかったメシアを知っているからです。

「イザヤ書」45章で、異国の王であるキュロスがメシアであると宣言したことは、当時の人々にとっては驚きであったと思います。イスラエルのメシアは、イスラエルの人々の中から選出され、イスラエルのみを救うと考えられていたからです。そのような驚きを超えて、天地を創造された主なる神様が、それら造られたすべてを救いへと導くために、遣わされた方がイエス様にほかなりません。わたしたちは、その方を知っているのです。「新共同訳」は「来る何か」を「しるし」という言葉を補って訳しましたが、もしその「しるし」という言葉を用いるならば、イエス様は、その主なる神様が示された救いの「しるし」にほかなりません。主なる神様が何を求めておられるかを、もっとも分かりやすく示した方です。そしてそのイエス様を、歴史的にでもなく、科学的にでもなく、論理的にでもなく、感覚的にとでもいえるような、わかりやすさで説明しているのが、本日の「ヨハネによる福音書」です。

本日の聖餐式聖書日課では、9節～17節となっております。しかし、15章1節以下には、「**わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である**」で始まるイエス様の有名な言葉があります。そして9節以下も、この箇所と無関係ではありませんので、このイエス様の言葉、「**私はまことのぶどうの木、私の父は農夫である**」(ヨハネ15:5)という言葉を含めて学んでいきたいと思えます。

旧約聖書ではぶどうの木は主なる神様とイスラエルとの関係を示す象徴です。ぶどうの実とは神様が与えた平和と豊かさを示します。主なる神様がイスラエルという木を育て、そしてその木に実を結ばせるからです。イエス様はその前提の中で、自分をまことのぶどうの木、父は農夫だと語ります。イエス様は自分が、新しいイスラエルの象徴であると語っているのです。「イザヤ書」にある驚

きを超えた、主なる神様の恵みをより豊かに示す方です。そしてイエス様を信じる者は、神様とイエス様との関係の中で、イエス様につながり、そして神様につながる枝となると語っています。そしてイエス様につながれば、神様につながるのであり、そして実を結ぶということです。また逆に、連なっていなければ、実を結ばないと語ります。

それでは、なぜ、つながっているだけで、そのようになれるのか。それは、そのつながりが「愛」によって構成されているからです。イエス様は、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい」(ヨハネ 15:9) と語る通りです。それは、主なる・父なる神様は、イエス様を、愛をもってぶどうの木としてしっかりと育ててきた。そしてイエス様もわたしたち信仰者一人一人を、枝としてしっかりと育ててきた。だから、その「愛」によって結びつく関係に留まっていなさいと命じているのです。つながっていれば大丈夫であるからです。

ただし、この「愛」という言葉は、「平和」という言葉と同じくらい、意味の広がりがある言葉です。それゆえに今日の福音書でイエス様は、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」(ヨハネ 15:12) と述べて、自分を例としています。さらに「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15:13) と分かりやすく説明しています。とくに、この言葉によって、十字架の死を通してイエス様が、わたしたちを友としてくださっていたことがわかります。先週も福音書はヨハネでしたが、そこでは、聖霊の大切さを学びました。その聖霊と結び付けて考えれば、イエス様を信じながら、誰かを、愛する、大切にする、あるいは誰かのために何かしたいと思う、そう思って行動する時、必ず聖霊が補って下さるのです。

「イザヤ書」を通して示された、未来につながる道を歩む人々であり、イエス様につながるということを具体的に示す人々、それがわたしたちの教会です。その教会も人間の集まりですが、単なる集まりとは違います。教会は、そこに集められる一人ひとりが大切にされるのです。神様が、イエス様を通して、わたしたち一人ひとりを愛してくれる場所なのです。それは、「わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ 15:16) とある通り、主なる神様が集めて下さった集いであるからです。

冒頭で未来が未定であることを書きましたが、わたしたちを導く主なる神様を信じる時、その歩みに不安はありません。主なる神様が、今の困難を乗り越える道を示して下さるからです。

今年も世界中の聖公会と呼応し5月13日昇天日から23日聖霊降臨日までの期間、心を合わせて祈るプログラムが行われます。ことに今年、東京教区では、ネットを通じたプログラムも行われます。いずれ今まで通りの礼拝が行われる日が来ると思いますが、新しい形で「み言葉」から学ぶこともあると思います。「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」、このイエス様の言葉を心に刻み、今週も祈りを合わせて過ごしていきたいと思えます。